様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６９０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ１３５５５

研究課題名（和文）近世ヨーロッパの貴族世界と政治・外交ネットワークに関する基礎研究

研究課題名（英文）Basic Research on the Political and Diplomatic Network of the Aristocratic Society in Early Modern Europe

研究代表者
帆北　智子（HOKITA, Tomoko）

創価大学・文学部・准教授

研究者番号：９０７１３２１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，ロレーヌ公国の貴族が公国の外部にその社会的，政治的紐帯を広げていきながら，ロレーヌ固有の自己意識を形成し，あるいは強化していったという，一見すると矛盾してみえる歴史現象について，ロレーヌ貴族社会に内在しただろう集団的アイデンティティ観から理解することである。そのため本研究では，ロレーヌ騎士団を対象として分析を行うことで，騎士団を中核とした政治・外交ネットワークの措定したうえで，ロレーヌ騎士団に共通する家系的戦略や行動原理といった，集団的アイデンティティ観に繋がる諸要素を析出しようと試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の近世ロレーヌ史研究は，ロレーヌ公国が仏独の利害に従属的であった面や，フランスへの統合を自明の前提とした議論が一般的だった。これに対して本研究は，ロレーヌ貴族が構築した越境的な権力構造に関する政治文化史的な分析によって，ロレーヌの主体的で自律的な側面にアプローチした。ここから，従属的とされた仏独との権力関係を実態レベルで捉え直すことで，ロレーヌに関する従来の史的評価を刷新しようとする射程をもつ。このような試みは，ロレーヌを「境域国家」とする概念枠組みの有効性を歴史学の観点から提言するものであると同時に，従来のヨーロッパ史像を再考，あるいは新たに追究しうる材料を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to understand the historical phenomenon that, while the nobility of the Duchy of Lorraine expanded their social and political ties outside the Duchy, they also formed and strengthened their own unique sense of self for Lorraine, which at first glance appears to be a contradictory phenomenon, from the perspective of the collective identity that may have existed within the Lorraine aristcratic society. To this end, this study attempts to analyze the "Chevaux de Lorraine" or the "Ancienne Chevalerie de Lorraine" in order to hypothesize a political and diplomatic network centered on these groups, and to extract various elements that lead to a collective identity, such as the family lineage strategies and behavioral principles common to the nobility of Lorraine.

研究分野：近世ヨーロッパ地域史，近世フランス史

キーワード：貴族　政治・外交ネットワーク　ロレーヌ騎士団　ロレーヌ大騎士　境域権力　近世ロレーヌ史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（1）　近世ロレーヌ公国（公権）に関する従来の諸研究は，公国がフランス，神聖ローマ帝国という二大権力の境域に位置していたことから，たとえそれらの研究がロレーヌの地方史モノグラフィの枠組みにあったとしても，仏独いずれかの一国史的関心に傾倒しがちな傾向にある。他方で，仏独の境域に位置するロレーヌ公国はヨーロッパの政治，外交，文化が交差する中心地の一つであったとする指摘もみられる。この指摘は，前段の伝統的な史的評価をポジティヴに捉え直したと言えるものの，近世ロレーヌ史の全体像に再検討を促すような議論には至っていない。その原因は，ロレーヌ公国がもつ交差域という側面を，領域的な意味での公国という固定的範囲に付帯した地域性としてのみ捉えていることから，公国内の事象として完結する内向きの議論に留まってきた点にある。

（2）　従来，ロレーヌ公国の歴史的特性について，ロレーヌ公権およびロレーヌ貴族家門を分析対象にそれぞれ考察してきた。とりわけ，シュワズル家をはじめとする貴族家門の考察からは，彼らがロレーヌ公権との近接的な関係と公国内の堅固な権力基盤を維持しつつ，ヨーロッパ横断的かつ越境的に政治・外交ネットワークを構築するという戦略的な側面をもっていた可能性をみいだしうる。この点は，地理的領域に留まらない「公差域」としてのロレーヌの地域性といえるのではなかろうか。つまり，ロレーヌ貴族が公国の外へとネットワークを広げていく側面は，地域性の分散，希釈に繋がる要因というよりも，むしろロレーヌ貴族の政治文化的素地を形成する推進力として作用し，ロレーヌの地域的一体性ともいいうる側面を涵養したのではないかと考えるに至った。

２．研究の目的

（1）　そこで本研究は，18 世紀のロレーヌ貴族が公国の外にその社会的，政治的紐帯を広げていきながら，ロレーヌに固有の自己意識を形成，あるいは強化していったという，一見すると矛盾する歴史現象について，ロレーヌ貴族社会に内在しただろう集団的アイデンティティ観から理解することを目的とする。

（2）　この目的に則して，本研究では，ロレーヌ貴族がヨーロッパ横断的に広がる政治・外交ネットワークを構築しえた（しようとした）背景にいかなる家系的戦略や政治的な行動原理を共有していたのかの解明を目指す。

（3）　また本研究は，フランス王権と神聖ローマ帝権というヨーロッパ二大権力に挟まれた「境域国家」としてのロレーヌの歴史的特性に，ヨーロッパ貴族社会の政治文化的な側面からアプローチするものである。
　これにより，ロレーヌを交差域　中心とみなす従来の議論を具体的かつ有意に発展させながら，ロレーヌに関する伝統的な史的評価を再検討できるとともに，近世ロレーヌ史，さらには近世ヨーロッパ史を新たな視覚から描く手がかりをもつかむ。

３．研究の方法

（1）　ロレーヌ貴族層のなかでも，18 世紀以降の公国において「ロレーヌ騎馬団」と呼ばれるようになった貴族家門に分析対象を絞る〔以下，騎馬団と略記〕。これらの家門は，ロレーヌ公権にくわえ仏独の権力下でも政治・外交分野に携わった人材を少なからず輩出していることから，このような越境的性格をもつ騎士団は，分析対象として最適である。

（2）　18 世紀ロレーヌ公権の政治的状況とその変化が，ロレーヌ貴族を軸とした政治・外交ネットワークの形成にどう影響を与えたかを検証するため，歴代ロレーヌ公の統治期をその性質が大きく異なる二つの時期に分けてそれぞれ分析したのち，比較・検討する。

（3）　本研究で扱う史料の多くはフランス・ロレーヌ地域の各文書館が所蔵している。とくに所領経営に関する史料は所領の所在地に応じて各地の文書館に散在していると思われるため，発掘がとくに困難と予想される。この場合，調査する家門の数を調整したり，各家門の中核となる所領の変遷や所領の授受，相続などの比較的追跡しやすい範囲に対象を限定したりといった工夫が必要となる。

　※　研究期間の前半では，個人的事情と現地文書館の長期閉館によって研究が思うように進捗せず，研究期間の後半では，コロナ禍によって史料収集のための海外渡航自体が不

可能となった。時間的，史料的制約があまりに大きく，研究の進捗が芳しくない期間が長期に渡ったことから，コロナ禍が落ち着いてからの研究期間では，上述したような当初の研究計画を大きく逸脱しない限りにおいて過去の研究課題のために収集していた史料を利用できるよう，研究方法と分析対象の範囲を適宜変更，縮小して対応せざるをえなかった。

4. 研究成果

（1）　騎馬団全体の家系構造を析出し，政治・外交ネットワークを措定するためのより適した手法を求めて，騎士団全体の家系構造モデルをより精緻に構築するためのツールや方法を検討した。具体的には，パッケージソフトウェアにある家系図作成ソフト各種，ネットワーク分析用ソフトの Pajek，統計解析ソフト R にある igraph パッケージを検討した。家系構造が内包する社会的紐帯の質や強度などを表現するためにさまざまな指標を利用することを考えると Pajek や igraph の利用がより適しているが，さらにネットワーク上の結節点をクラスタリングするといった種々の統計処理を想定すると，より汎用性の高い igraph の利用が最適との結論に至った。

（2）　18 世紀末から 19 世紀にかけて集中的に刊行された騎馬団に関する叙述や著作群（名簿や辞典類，刊行史料なども含む）を手がかりに、近世ロレーヌの貴族史研究を進めるための新たな課題や展望をえた。この作業は，ロレーヌ貴族の性格や分析対象の軸となりうる貴族家門の輪郭をより明確化するためのものであると同時に，本研究に必要な史料収集が長期的に困難であった状況下において，すでに手元にある史資料をもとに本研究を進展させるための可能性を模索するためのものであった。

各著作が挙げている騎馬団の構成家門や彼らの社会的，政治的属性に焦点を当てて著作群を総合的に分析したところ、騎馬団に属するとみなされた家門は，ロレーヌ大騎士とよばれる伝統的な貴族家門をベースにしていることが判明した。大騎士は，中世にその法的実体と活動実態を確認できる公国の高位貴族集団である。本研究が対象時期とする 18 世紀には集団としての実体は確認できないものの，18 世紀においてもなおロレーヌ公国の有力貴族とみなしうる旧大騎士家門が一部存続していたことから，分析対象を騎馬団からシフトし，旧大騎士の政治的動向に着目して分析を進めることが妥当だと判断した。

（3）　ロレーヌ大騎士に属した貴族家門のうち，分析対象の軸として選定した家門の権力基盤に迫るため，各家門の官職獲得状況について，大騎士の上位権力層との関係から検討した。17 世紀前半までの各家門は，公国の騎士法廷を構成する家門であること，すなわち，ロレーヌ公との関係が重視され，これとの関係に限定された官職を獲得している傾向がみられた。しかし，17 世紀中ごろからは，神聖ローマ帝権（ハプスブルク家），あるいはフランス王権の下で官職を獲得している家門が増加しており，官職獲得にみる権力基盤の形成傾向に，領域的な広がりを確認することができた。この傾向の変化は，ロレーヌ公国とロレーヌ公をとりまく，国内および国際情勢の変化と軌を一にしていることから，各家門もそれらの影響を受けたことを推測することができる。しかし，こういった外的変化に即応したかのようにみえる官職の獲得が，なぜこれらの貴族家門に可能であったかという理由の考察については，史料の不足から着手することができなかったため課題として残された。

（4）　ロレーヌ貴族を軸とする 18 世紀の政治・外交ネットワークが，大騎士家門の出身者によって主導的に構築されていったのではないかという予測のもと，分析作業をさらに進めた。大騎士は，彼らが中世より運営してきたロレーヌ騎士法廷が停止された 17 世紀なかごろを境に「没落」していく社会集団と一般に理解されている一方で，個別の大騎士家門に目をむけると，必ずしも彼らが「没落」したとは判断できない状況や側面を多く確認することができる。そこで，騎士法廷に改めて着目し，中近世の公国における上位貴族層の政治的，社会的な位置づけを明らかにすることで，18 世紀における旧大騎士家門の動向や政治的役割の変容などを見通すための考察材料をえようと試みた。

大騎士は，騎士法廷（およびロレーヌ三部会）をつうじて公国の司法および立法権をほぼ独占することで，強い閉鎖性をともなう自己完結的で同質的な貴族集団を形成していった。くわえて，騎士法廷は，大騎士による権力実践の場であっただけでなく，彼らが公国の政治的，社会的ヒエラルキーの頂点にいることを如実に表象する場でもあった。本研究のこれまでの成果を踏まえると，大騎士が騎士法廷を通じて培ってきたこのような政治的，社会的位置づけが，騎士法廷の停止によって即座に解消され，大騎士が「没落」に向かったとは考えづらい。騎士法廷はむしろ，一方では 18 世紀において政治・外交ネットワークの構築を可能とした集団凝集性の高い貴族集団の母体を創出し，他方ではその停止が，結果として公国外でのネットワーク構築に向かわせることになるような戦略の変更を大騎士家門に迫ったと考えうる。しかし，以上の議論はあくまでも仮説に留まっているため，今後，史料的な裏付けによる補完が必要である。

（5）　研究期間の終盤においてもなお十分な史料収集がかなわなかったことから，本研究の開始当初に予定していた分析対象をかなり絞って作業をすすめた。具体的には，ロレーヌ大騎士に属する家門を広く分析対象としていた点を変更し，そのうちの一家門であるシュワズル家と同家と婚姻関係を結んだ家門に限定したうえで，以下のような分析，考察をおこなっていった。

まずは，およそ 16 世紀から 18 世紀中期におけるシュワズル家の結婚の選択や親族関係の広がりを地域的な側面から整理してその動向を明らかにした。これにより，境域を主たる拠点とした貴族家門の領域性という視角からロレーヌ貴族を軸としたネットワーク構築について考察した。次いで，先の考察で用いたデータとその分析結果を踏まえ，シュワズル家にみられる行動原理の一側面を結婚相手の選択という側面から導出し、これにたいして上位権力の動向がどの程度、あるいは、どのように連動していたかについて定量的な手法を用いた分析をおこなった。

以上は，シュワズル家の結婚行為に限定した分析ではあるものの，ここから得られた成果から，18 世紀のロレーヌ貴族が軸とする政治・外交ネットワークのベースとなるロレーヌ貴族の家系的戦略と政治的行動原理の一端を明らかにすることができたと考える。

※　本研究のために使用を予定していた諸史料は，研究期間の最終年度になってようやくその一部の収集がかなった。現在，それらの史料の整理と読解作業をおこなっている最中である。今後，研究期間中に残された課題への取り組みと，計画変更によって行えなかった分析作業を継続しておこない，ここでえられた成果は順次発表していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 帆北智子	４．巻 17
２．論文標題 『近世ヨーロッパ境域における貴族の結婚、親族関係、領域性 ―シュワズル家の事例― 』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『ヨーロッパ研究』	６．最初と最後の頁 71-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 帆北智子	４．巻 16
２．論文標題 近世ヨーロッパ境域貴族の結婚行為に関する定量分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『人間学論集』	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 帆北智子	４．巻 16
２．論文標題 ムルト = エ = モゼル県文書館史料 3F fonds dit de Vienne： 近世ロレーヌ史研究のための覚書き	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『ヨーロッパ研究』	６．最初と最後の頁 71-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 帆北智子	４．巻 16
２．論文標題 中近世ロレーヌ公国の騎士法廷と大騎士ー騎士権力の場とその形成ー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『ヨーロッパ研究』	６．最初と最後の頁 15-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 帆北智子	４．巻 13
２．論文標題 近世ロレーヌ公国の大騎士－18～19世紀の騎馬団に関する著作群を手がかりとして－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『ヨーロッパ研究』	６．最初と最後の頁 50-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関